

# KALS NEWSLETTER 52

2015年11月  
九州アメリカ文学会  
事務局 西南学院大学文学部英文学科  
福岡市早良区西新6-2-92  
〒814-8511

## アメリカ文学研究活動のハイブリッド化

早瀬博範（佐賀大学）

九州地区のみならず、全国レベルでも、アメリカ文学会の会員数がじり貧状態である。今年の代議員会でも会員数激減が議題となったほど深刻だ。それに追い打ちをかけるように、文科省も国立大学からの「文系廃止」を「要請」（文科省の「要請」は事実上の命令である）した。世間の非難が予想以上に厳しかったために、「そんなつもりはない」と沈静化に務めているが、要請の文書の訂正はない。この動きは今突然起こったのではなく、文学部、そして教養部の廃止、教育学部系の新課程の廃止と、文科省としては予定されたシナリオである。このまま実学重視の時代風潮に押し流され、文学研究などは消え行く運命と達観するのも、極めて「文学的」ではあるが、それでは殺伐とした世の中になり、私たちが長年やってきた、あるいはやっていることの意味もなくなり、結果、文学研究など所詮、研究者だけの自己満足だったということになりかねない。では、今どういう対応策が打てるのだろうか。これは職業としてアメリカ文学研究に携わっている私たち一人ひとりに課された課題である。

対策には多くの人の知恵が必要であるし、時間もかかるだろう。目下、私が考える方法の一つが「ハイブリッド化」である。まずは、大学の授業のハイブリッド化である。会員数を伸ばすには、若い人にアメリカ文学に興味をもってもらわなければならない。そのためには、大学でいい文学の授業をする必要がある。しかし、文学の授業といえど、訳読式一遍の授業をやっているだけでは、文学に興味をもってくれるとは期待できない。

昔も現在も、自分も含めて「大学に入ったらアメリカ文学をしよう」などと思って大学へ入学してくる学生はほとんどいない。「英語が好きだから」「海外へのあこがれ」などの動機で英文科や外国語学科を専攻してくる。私たちの使命は、そのような英語を頑張りたいと思っている学生に、いかにアメリカ文学が楽しいか、いかに骨太で高度な英語力を養うのに有効かを伝えることにある。一部の文学部を除けば、純粋に文学だけで授業を構成するのは困難な時代になっているが、幸い「英語力育成」や「グローバル人材育成」は、

国を挙げて強化が叫ばれている。この時流に乗り、語学の授業や文化論、コミュニケーションの授業でも、文学教材の活用を積極的に試みるべきである。しかし、その際、ただ文学題材を純粋に提示するのではなく、学生に魅力を分かってもらえるように、ICTを駆使したり、興味深いテーマを与え考えさせたり、コミュニケーション力を重視したアプローチをしたり、作品の文化的歴史的背景を調べさせたりと、授業を「ハイブリッド化」する必要がある。文学の英語教材としての可能性を最もよく知っているのも文学研究者である私たちである。食わず嫌いの学生に、いかに美味しいと思わせるか、教員一人ひとりの料理法にかかっている。そのために学会としては、英知を結集し、文学を題材にした魅力ある授業ができるテキストを作成することも大事な任務となる。

次に、研究体制のハイブリッド化である。文学研究自体は孤独な作業であるが、発展させるには、多種多様な人々との交流が重要であり、延いては、それが裾野を広げることになる。具体的には、ベテランの研究者と若い研究者の交流、地域を越えた交流、分野や対象の作家を超えた交流、このような異質な人々との交流が活性化に繋がるはずである。研究、特に文学研究は、いわゆる「たこつぼ化」しやすいので、努めて異なる「人種」と交流し、ハイブリッド化すべきである。学会をそのための交流の場としたい。学会も「来てよかった」「参加して楽しかった」と言われるように、知的に「費用対効果」が得られるよう、海外の学会等を参考に工夫をしたい。

文学研究は実生活には役立たないと言われるが、果たしてそうだろうか。東日本大震災は、多くの人に言葉を奪うほどの衝撃をもたらし、生活の最低限の基盤が失われた多くの被災者を目の当たりにし、文学研究者の多くが無力感を味わった。しかしながら、時間が経つにつれて、励ましの言葉や、詩集の一節、歌詞のフレーズなどが被災者を勇気づけたり、被災者のやり場のない苦しみや悲しみを言葉にすることで救われたりするという事実も多く耳にした。災害は言葉を奪うが、しかし言葉を紡ぐことが再生に繋がるのも事実である。文学、そして文学研究が人間の営みには不可欠であり、さらに人生を豊かにするものである。

学会とは単なる趣味の会ではない。その学問をより発展させるためにある。文学研究不要論が叫ばれる今こそ、私たち文学研究者が存在意義を主張し、その魅力をより多くの人々に伝える努力を続けなければならない。

私も知恵を絞り、学会の活性化に努力したいと思っています。是非、会員の皆様から活性化のための提案をお願いいたします。

## 地区便り

### <佐賀地区>

佐賀大学 鈴木繁

九州アメリカ文学会佐賀地区として活動実体がないため、佐賀大学アメリカ社会文化研究所の活動報告をもって、代わりとしたいと思います。

もう一年近くも前のことになりますが、九州アメリカ文学会会員の早瀬博範先生が所長をつとめます佐賀大学アメリカ社会文化研究所の主催にて、2回連続の学術講演会が開かれました。1回目は12月2日(火)の16:20から、福岡大学教授の光富省吾先生(九州アメリカ文学会会員)をお迎えし、「ヘミングウェイの初期短編小説から見るアメリカ社会の階級構造」と題して、ご講演いただきました。2回目はその2週間後の12月16日(火)の16:20より、元東京大学教授で翻訳家としても有名な柴田元幸先生を講師にお招きし、「アメリカ文学の愉しみ」との演題で、ご講演いただきました。いずれの講演会も、学生のみならず、教職員や一般市民を含む大勢の方々の参加を得て、聴衆は講師の刺激的な話に一心に聴き入っていました。講演終了後、講師とフロアーの間で質疑応答が行われ、盛会のうちに終わりを告げました。学生の間からは、同様の催しをまた開いてほしいとの声が多数聞かれました。

\*ニューズレター係よりお詫び:

前号用に鈴木先生からご投稿いただいております佐賀地区便りですが、こちらのミスで未掲載となっております。大変失礼いたしました。今回、鈴木先生にご了解いただき、時期の表現を訂正の上、掲載させていただきます。鈴木先生を始め、会員のみなさまには重ねてお詫び申し上げます。

(KALS ニューズレター係 下條恵子)

### <熊本地区>

熊本大学 池田志郎

7月以降の熊本アメリカ文学研究会の活動をご報告いたします。この研究会の中心は九州アメリカ文学会の熊本在住の会員ですが、アメリカ文学・アメリカ文化に関心のある方ならどなたでも参加できる地域開放型の研究会です。各人の研究成果や蘊蓄を披露する場でもあり、毎回、研究者以外の方も参加されていて、和気あいあいとした雰囲気が進められています。

○129回(2015年7月18日)熊本大学にて

題目: 自然との一体感について(その形成と示唆するもの)

発表者: 荒木 忠久 (熊本大学非常勤講師)

司会者: 馬渡 美幸 (熊本大学非常勤講師)

\*Rachel Carson の *Under the Sea-Wind* の中の Book 2 "The Gull's Way" をめぐっての

発表でした。自然との共生の難しさ、人間個人の生き方を巡る問題、また環境問題に対してどう対処すればよいのかなど、参加者の体験談や現在の日本の状況などについて活発な意見交換がなされました。自然の一部としての人間、自然を征服するものとしての人間、自然を生き物としてとらえる哲学思想、地球全体としての問題意識など、考えなければならないことは山ほどあるようです。便利な世界に生きている私たちが自然はどのように見ているのでしょうか。

○130回（2015年9月19日）熊本大学にて

題目： *Brave New World* にみる集団と個人、人間らしさとは

発表者： 高津 亜吏（熊本大学非常勤講師）

司会者： 池田 志郎（熊本大学）

\*アメリカ小説読解にも資するものがあるかもしれないということで、今回はイギリス人作家オルダス・ハックスレイの作品についての発表でしたが、非常に参考になりました。家庭環境や病気との闘い、東洋への関心などが作家を形作り、人は社会の中でどうあるべきか、社会は人にとってどういうものか、幸福とは何か、などが問題提起されているとの内容でした。それに対して、反ユートピア小説や E.A.ポールのものかもしれないとされる小説断片の紹介や現在の日本やアメリカの政治状況についての言及など、多方面からのコメントが出されました。個人の感情や社会をコントロールすることは為政者がやりたがることですが、それを正しい方向へ向かわせるのは文学の想像力かもしれません。われわれ研究者もその一端を担っているのではないのでしょうか。

なお、次回はラーセンの *Passing*（11月）、次々回はスタインベックの *America and Americans*（来年2月）が予定されています。熊本地区の研究会に関心のある方はメールにて池田（ikedash@educ.kumamoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

<鹿児島地区>

鹿児島大学 千代田夏夫

九州支部会員の動向をお知らせします。千葉義也先生（鹿児島大学名誉教授）は『ヘミングウェイ研究』16号（2015年6月）の巻頭企画「日本のヘミングウェイ研究・座談会（1）—1999—2008—」（オブザーバー：上西哲雄先生、司会：高野泰志先生）にて、今村楯夫・島村法夫・前田一平・新関芳生各先生とともにヘミングウェイ研究史を具体的な論文を挙げながら振り返っておられます。また同誌掲載の「日本におけるヘミングウェイ研究—2014—」もますます充実、千葉先生の重要なご業績がまた一年分重なりました。森孝晴先生（鹿児島国際大学）は、薩摩藩英国留学生渡航150周年となる今年、これからのものを含め一年間で12回以上のご講演をなさるご予定です。それに伴い、ジャック・ロンドンと交友のあった留學生長澤鼎についてのご論考「アメリカに生きたサムライ・長沢鼎—鹿児島国際大学資料—」を『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第16巻第2号に掲載されました。千代田は

8月29・30・31日の三日間、鹿児島大学にて開催された大学英語教育学会（JACET）第54回国際大会にて「高等教育における中等英語指導法のあり方—米国文学とジェンダー・セクシュアリティ問題を教材として」を発表いたしました。

#### < 沖縄地区 >

琉球大学 喜納育江

沖縄地区では、まず、2015年8月1日付けで、琉球大学の専任講師に、山里絹子さんが着任しました。九州アメリカ文学会へもまもなく入会することです。山里さんは、琉球大学を卒業後、沖縄県の留学制度である小渕スカラシップにより、ハワイ大学へ留学し、そこでM.A.とPh.D.を取得しました。専門はアメリカ研究で、ハワイの沖縄系移民のオーラルヒストリーや、米国が冷戦期におけるアジア太平洋地域戦略の一環として推進した外国人留学制度に関する研究等を行っています。従来のアメリカ文学の陣容に、今回、アメリカと沖縄を結ぶ社会・文化研究を専門とする山里さんが加わることで、教育カリキュラムの充実はもとより、沖縄に立地する琉球大学の歴史・文化的特色を活かしたアメリカ研究の成果が期待されます。

沖縄地区の会員もそれぞれ活発な研究活動を行っています。まず、琉球大学の加瀬保子さんは、鹿児島大学の竹内勝徳先生、九州大学の高橋勤先生をはじめとする研究グループが進めている科研費基盤Bの研究プロジェクト「アメリカン・ルネサンス文学における情動と身体アフェクト理論とその応用」の一環として、8月17～19日の日程で福岡と大分で開催された九州アメリカン・ルネサンス研究会の夏季セミナーに招待され、“Medical Gaze and Affect in *A Gesture Life* by Chang-rae Lee”と題する講演を行いました。そして、琉球大学の小林正臣さんは、日本アメリカ文学会の英文号 *The Journal of the American Literature Society of Japan* の第14号に、論文“Bartleby’s Diversified: *Miss Lonelyhearts* and Office Fiction”が掲載されることが決定しました。また、沖縄工業高等専門学校の名嘉山リサさんは、来年4月より、米国ジョージワシントン大学のElliott School of International AffairsのSigur Center for Asian Studiesで、客員研究員として在外研究を行うことが決まりました。研究テーマは、“A Comprehensive Study on the Films Produced by the United States Civil Administration of the Ryukyu Islands (USCAR) in Okinawa during the Period of the US Rule, 1945-1972”で、1年間の研究期間に、米国立公文書館などでリサーチをする予定です。

ジャンル、研究対象、アプローチのどれを見ても、ここ10年ほどで、アメリカ文学研究の景色は目まぐるしいほどの速度で変化してきたように思います。複雑な流れの先を見極めることなど到底できそうにありませんが、今は多様なアメリカ文学研究のもつそれぞれの面白さを、九州・沖縄の同僚たちの研究成果から学んでいければと考えています。

## 事務局からのお知らせ

### (1) 九州アメリカ文学賞応募

『九州アメリカ文学』56号にありますように、九州アメリカ文学賞（新人賞）の応募締切は2016年2月20日（土）です。応募をお待ちしています。

従来は郵便による応募に限定していましたが、今年より電子メールによる応募も可能となりました。

#### (i) 郵送の場合

〒814-8511 福岡市早良区西新 6-2-92 西南学院大学文学部英文学科  
九州アメリカ文学会事務局 宮本敬子 宛

#### (ii) 電子メールの場合

高橋美知子（福岡大学）[mtakaha@fukuoka-u.ac.jp](mailto:mtakaha@fukuoka-u.ac.jp)

いずれの場合も、「九州アメリカ文学賞論文応募」と明記して下さい。

### (2) 『九州アメリカ文学』投稿

『九州アメリカ文学』56号にありますように、『九州アメリカ文学』への投稿は2016年4月30日締切です。こちらも応募をお待ちしています。

宛先は

〒814-8511 福岡市早良区西新 6-2-92 西南学院大学文学部英文学科  
九州アメリカ文学会事務局 宮本敬子 宛

### (3) 「九州アメリカ文学会出版助成金」申請

2016年度「九州アメリカ文学会出版助成金」への申請締め切りは、2016年2月29日（月）です。申請の要領は、『九州アメリカ文学』56号を参照下さい。

### (4) 九州アメリカ文学会第62回大会発表者募集

九州アメリカ文学会第62回大会は、2016年5月7日（土）、8日（日）の両日、九州大学伊都キャンパスにおいて開催されます。つきましては、下記の要領で研究発表を募集いたしますので、ふるってご応募ください。多くの研究者の積極的なご参加をお願いいたします。

1. 発表者は大学院博士前期課程（修士課程）在学者を含むアメリカ文学研究者。

2. 発表時間は40分（発表30分、質疑応答10分）。

3. 発表は英語でも日本語でも可。

4. 発表希望者はタイトルとレジюмеを以下の要領で提出すること。

\* レジюмеは発表の際に使用する言語で作成すること。

\* 英文の場合は300語程度。

\* 日本語の場合800字程度とし、数行の英語の要旨または数語のキーワードを文末に付加すること。

- \* 発表題目の固有名詞（作家名・作品名）は英語とする。
  - \* コンピューターで作成する場合は、Wordを使用し、メールで添付書類として送付するか、ワープロソフト名が明記されたフロッピーディスクに原稿を添えて郵送すること。
  - \* 提出先 メール [tsutomu@fkc.kyushu-u.ac.jp](mailto:tsutomu@fkc.kyushu-u.ac.jp)
- 郵送先 〒811-1123 福岡市早良区内野7-11-6 高橋 勤
- \* 締め切りは2016年2月20日（土）（必着）。
  - \* 大会ならびに発表に関するお問い合わせは、高橋 勤（tel.092-803-2217/ e-mail: [tsutomu@fkc.kyushu-u.ac.jp](mailto:tsutomu@fkc.kyushu-u.ac.jp)）までお願いします。実りある大会にするために、多くの応募を期待いたします。

#### (5) 『アメリカ文学研究』, *The Journal of the American Literature Society of Japan* 論文投稿

日本アメリカ文学会発行の『アメリカ文学研究』（和文、英文）への論文投稿希望の方は、直接、本部事務局へ論文を送付してください。原稿送付先住所、締切り等、詳細は必ず本部のホームページにてご確認ください。

#### (6) 日本アメリカ文学会第55回全国大会発表者募集

2016年10月開催の日本アメリカ文学会第55回全国大会（10月1日（土）・2日（日）、ノートルダム清心女子大学）で発表を希望される方は、名前、住所、略歴、現在の所属、発表のレジュメを事務局のメールアドレス（[keikom@seinan-gu.ac.jp](mailto:keikom@seinan-gu.ac.jp)）に3月31日までに電子メールで応募してください。

以下の点に特に気をつけてください。

- (i) 略歴では、連絡用のメールアドレス、6～7月にかけてゲラを送送する宛先の住所（郵便番号）、現在の所属（常勤か非常勤か）を必ず明記する。
  - (ii) 発表タイトルに副題をつける場合は、和文は「—」。英文は「:」に統一する。
  - (iii) 発表レジュメの字数は日本語で1200字程度、英文で400語程度。
- 例年会員に送られる年賀状にその詳細が記載されるので、発表予定の方は必ず参照する。

#### (7) 会計からのお知らせ

大学等の所属に変更がございましたら、年会費振込用紙にその旨をお書きいただくか、あるいは、KALS 会計(藤野功一：[k-fujino@seinan-gu.ac.jp](mailto:k-fujino@seinan-gu.ac.jp))までメールにてお知らせください。どうぞよろしく願いいたします。

以上